

長岡大学生による授業評価に関する分析

平野 順子*

キーワード 授業評価、FD、大学、授業

1 はじめに

現在、学生による「授業評価」が多くの大学で実施されている。文部科学省（2004）によれば、平成14年度に学生による授業評価を実施している大学は574校に上り、全大学の約84%を占める。こうした動きは、91年の大学設置基準の大綱化に伴う大学改革の流れで、各大学に自己点検・評価の導入が義務づけられてきた中で本格化してきた。98年の大学審議会による答申では、日本の発展と高等教育の役割について述べており、それをふまえつつ、高等教育機関に何が求められており、高等教育機関は何をなすべきなのかを提言している。中でも「教育活動の評価の実施」として、学生による授業評価の実施など様々な機会を通じて、教育の充実を図ることが重要であると述べられている。

そもそも授業評価は、1950年代に、アメリカで学生たちが自主的に行ったことから始まったと言われている。1960年代には全米に広がることとなった。しかし日本ではかなり立ち後れ、1990年代に広まることになったと考えてよいだろう。

大学教員の多くは、教える資格を有しているわけではない。教えるスキルがあるからではなく、研究業績や実務実績によって大学教員になっている。そのため、学生が満足する授業内容・方法が実施されているかをある程度客観的に把握する指標が必要と言われている（児玉ら；2004）。本学でも、開設以来授業評価アンケートが実施されており、本稿では、そのデータの一部について論じることとする。

2 本学における授業評価の取り組み

本学が開設されたのは2001年のことである。「学生が満足する授業作り」を標榜し、学生による授業評価の取り組みは、教務委員会の先導のもと、その初期より実施されていた。当時から全学的に授業評価アンケートが実施されており、現在はほとんど全ての授業で評価は行われている。

本学における授業評価は、教員の授業に関する技能を学生の目を通じて把握するためのものであり、教員自らの自律を促すものである。また、月1回実施されているFD研究会において、授業評価についての議論もたびたび行われている。

本年度より、本学図書館で授業評価報告書を閲覧することが可能になっており、結果は学生にもフィードバックされている。

2004.10.14 投稿 2005.2.5 受理

*長岡大学産業経営学部講師

3 先行研究レビューと本稿の目的

我が国では、大学生による授業評価に関する研究は、80年代から一部の大学・学会において実施されてきた。それ以前は、日本では、授業評価についての議論は全くと言っていいほどなかったのである。90年代に入り、各大学で実施されている授業評価についての報告や授業評価の分析が各大学紀要等に掲載されることが多くなり、近年とくに活発化している。

学生側の要因と授業評価との関係については、単位を認定された場合の方が、不認定の場合よりも評価が高いこと（南・松尾；2000、牧野；2000）、アンケート用紙が記名式であっても無記名式であっても、授業評価には差は見られないこと（牧野；2003a）などが明らかにされてきた。

また、授業に対する姿勢に関しては、勉学の意欲に欠けており大学の授業を改善しようとさえ思わない学生もいることがデータで示されている（稲吉ら；1998）。

また、授業の「理解」と「満足度」との関係を見ると、理解度が増すことで授業に対する満足度が高まるというよりも、むしろ総合的な満足度が高まることで、授業の理解度が増すというモデルの方がより適切であること（星野ら；2003）が明らかになっている。

また、授業に関する要因と授業評価との関連では、全国7つの国立大学の授業評価データでは、前期よりも後期に授業評価平均値が上昇していた（渡辺；2003）。

これまでの研究を受け、本稿では昨年度に実施された授業評価アンケートの個票データを用い、①本学学生が授業をどのように捉えているかの実態把握、②学生が「この授業を受けてよかった」と思うか否かを決める構造的要因の検討、を行うことを目的とする。まず本学の学生が授業に対してどの程度評価しているのかについて実態を把握することが重要である。そして、学生が授業に満足しているか否かということは、「授業を受けてよかった」という感想に集約することができると考えられる。また、今まで見てきた先行研究の多くは、特定の大学の特定の授業で実施された授業評価アンケートの分析であり、全学的に実施されたアンケート結果の分析というのは数少ない。本学はほとんど全ての授業で統一された形式の授業評価アンケートが実施されており、そのデータを再分析することが可能である。また、上記で記した研究の多くは「どういう学生がどのような評価をつけるか」という学生面の分析が多いように思われる。そこで本研究では、この全学的なデータを用い、授業を受けてよかったと思うか否かを決める、授業の構造的要因について検討する。

4 本学の授業評価アンケートについて

(1) アンケートの配布・回収

本稿では、2003年度に実施された授業評価アンケートの個票データを再分析する。この授業評価アンケートは、半期授業では13週・通年授業では28週（いずれも最終3週目の授業）に、各授業担当教員より学生に配布され、学生の代表者が回収し、回収担当事務まで届けるという一連の作業によって実施された。つまりアンケートを実施した日に欠席していた学生はアンケートには回答していない。調査を実施したのは、124科目であった。

(2) アンケート用紙の質問内容

本学が実施している授業評価アンケートの質問内容は、以下の通りである。

[フェイスシート]

学年：1. 1年 2. 2年 3. 3年

性別：1. 男 2. 女

1. 留学生 2. 日本人

[1] 出席

あなたはこの講義にどの位出席しましたか？

1. 80%以上出席 2. 80～60%出席 3. 60～30%出席 4. 30%以下

[2] (留学生のみ答えて下さい) 私は日本語が十分理解できた。

1. その通りだと思う 2. だいたいそうだと思う 3. 余りそう思わない 4. 全く思わない

[3] 講義の内容(「1. その通りだと思う 2. だいたいそうだと思う 3. 余りそう思わない 4. 全く思わない」のうち該当するものひとつに○をつけて下さい)

- ① この講義を受けてよかったと思う
- ② 何がテーマか毎回明確である
- ③ 高校とは違う高度で専門的な内容である
- ④ 講義に関連した問題やテーマへの理解や感心が深まった

[4] 講義方法(「1. その通りだと思う 2. だいたいそうだと思う 3. 余りそう思わない 4. 全く思わない」のうち該当するものひとつに○をつけて下さい)

- ① 教員の説明は分かりやすかった(話し方・説明の仕方・黒板の使い方など)
- ② 講義はシラバス(キャンパス・マニュアルの講義要綱)にそって進んでいる
- ③ 学生に定期的に質問のチャンス(質問票の配布・回収も含む)を与えている
- ④ 質問したことに対して、教員はていねいに説明してくれた
- ⑤ テキスト・参考文献やプリントなどの資料が十分に活用されている

[5] 講義の管理(「1. その通りだと思う 2. だいたいそうだと思う 3. 余りそう思わない 4. 全く思わない」のうち該当するものひとつに○をつけて下さい)

- ① 私語や授業中の態度をきちんと注意している
- ② 遅刻者に対してきちんと対応している(注意する、減点するなど)
- ③ 出欠をきちんととっている

[6] 講義にあなた自身はどのような態度でのぞんでいますか(「1. その通りだと思う 2. だいたいそうだと思う 3. 余りそう思わない 4. 全く思わない」のうち該当するものひとつに○をつけて下さい)

- ① 私は講義の内容をよりよく理解するために時間外に勉強をした
- ② 講義には遅刻しない
- ③ 講義の最中に私語はしない
- ④ 講義内容をノートにとっている(板書だけでなく、話している内容も含めて)
- ⑤ 質問の機会が与えられた場合、私は積極的に質問している

[7] なぜこの講義をとったのか、次の選択肢の中から三つ以内で選んで下さい。

- ① 単位がとりやすいと先輩などから聞いたので
- ② 講義の時間帯が都合がよかったので
- ③ 興味のあるテーマだったので
- ④ 担当教員の話しがおもしろそうだったと思ったので
- ⑤ 必修だったのでやむを得ずとった

⑥ 必修ではなかったが、単位取得のためとりあえず履修した

⑦ その他（ ）

[8] 講義（内容や進め方、教室の様子など）に関してよいと思った点を書いて下さい。

（自由記述）

[9] 講義（内容や進め方、教室の様子など）に関して悪いと思った点を書いて下さい。

（自由記述）

なお、上記アンケート中、[3]～[5]が授業評価に関わる質問であり、本稿では、主にこの部分の分析を行う。

(3) 得点加算方法

授業評価に関わる [3]～[5] の 12 項目、また学生の自己評価に関わる [6] の 5 項目については、「1. その通りだと思う」には 2 点、「2. だいたいそうだと思う」には 1 点、「3. 余りそう思わない」には -1 点、「4. 全くそう思わない」には -2 点を与え、平均値を計算した。ポジティブな評価の場合には平均値はプラス、ネガティブな評価の場合には平均値はマイナスの値となる。

5 結果

(1) 回答者の概要

各科目で授業評価アンケートを実施しているため、回答学生数は延べ数である。回答者数は、延べ 3024 人であった。回答者の概要は、図表 1 に示した通りである。

なお、図表 1 の通り、「授業曜日」の「土曜」と「集中講義」、「授業時限」の「集中講義」は非常に少ない割合となっている。なるべくデータを均等にするため、授業曜日と授業時限における「土曜」と「集中講義」は、以下の分析から除外することとする。

図表 1 回答者の概要一覧

		実数	%
学年	1年生	778	25.7
	2年生	1021	33.8
	3年生	1179	39.0
	NA	46	1.5
性別	男	2097	69.3
	女	831	27.5
	NA	96	3.2
国籍	留学生	748	24.7
	日本人	2273	75.2
	NA	3	0.1
日本語を十分理解できた (留学生のみ)	その通り	264	35.2
	だいたいその通り	416	55.4
	余りそう思わない	55	7.3
	全く思わない	7	0.9
	NA	9	1.2
授業曜日	月曜	524	17.3
	火曜	742	24.5
	水曜	579	19.1
	木曜	535	17.7
	金曜	602	19.9
	土曜	16	0.5
	集中講義	26	0.9
	NA		
授業時限	1限	597	19.7
	2限	767	25.4
	3限	928	30.7
	4限	706	23.3
	集中講義	26	0.9
	NA		

(2) 本学学生が授業をどのように捉えているか：授業評価質問項目について

4 (2) に記した「アンケート用紙の質問内容」のうち、[3] ～ [5] の 12 項目が授業評価に関わる質問項目である。これらの質問項目を「授業評価」に関わる質問群として、この 12 項目の質問群のクロンバックの α 係数を求めたところ、 $\alpha = .8795$ であり、十分な内的一貫性があることが明らかになった。

授業評価の各質問項目の平均値は、図表 2 に示した通りである。

図表 2 を見ると、全項目の平均値、また各質問項目ともに、絶対値がプラスの値を示している。つまり、本学の学生は授業に対して、全般的にポジティブな評価を行っているということである。中でももっとも評価点が高いのは「[5] ③出欠をきちんととっている」であり、その値は 1.50 にのぼる。続いて「[3] ③高校とは違う高度で専門的な内容である」が 1.34 と続き、次に「[3] ②何がテーマか毎回明確である」が 1.24 と続く。

逆に評価点が低い項目は、「[5] ②遅刻者に対してきちんと対応している」がもっとも低く 0.74 である。続いて「[4] ③学生に定期的に質問のチャンス（質問票の配布・回収を含む）を与えている」が 0.86 であり、次に「[3] ④講義に関連した問題やテーマへの理解や関心度が深まった」が 0.88 と続く。平均が 1.00 を切ったのは、この 3 項目のみであった。

付記しておく、本学では、この授業評価質問項目を用いて授業評価アンケートを行ったのは、2003 年度が 3 度目である。2003 年までの授業評価合計点の平均値の推移を見てみると、2001 年度は 0.87、2002 年度は 0.97、2003 年度が 1.11 であり、授業評価アンケートを実施しはじめて以来、年々その平均値は高まっている。先行研究にもあるように、大学生として授業を受けた経験が長くなるほど、大学の

勉強に慣れるためか、授業に対する評価が高くなる傾向がある。本学は 2001 年に開学したため、授業を評価した学生は、2001 年度は 1 年生のみ、2002 年度は 1 年生と 2 年生、2003 年は 1 年生と 2 年生と 3 年生と、年々上級学年の学生が存在することになっている。そのために、授業評価の平均点が上昇していると考えることができる。また、授業評価アンケートや FD 研究会を重ねた効果であり、教員の努力や工夫が実を結んでいるということもできるかもしれない。

図表 2 授業評価の各質問項目の平均値・標準偏差

	Mean	SD
全項目	1.11	.70
[3]①この講義を受けてよかったと思う	1.18	1.02
[3]②何がテーマか毎回明確である	1.24	.98
[3]③高校とは違う高度で専門的な内容である	1.34	.94
[3]④講義に関連した問題やテーマへの理解や関心度が深まった	0.88	1.14
[4]①教員の説明は分かりやすかった(話し方・説明の仕方・黒板の使い方など)	1.03	1.13
[4]②講義はシラバス(キャンパス・マニュアルの講義要綱)にそって進んでいる	1.15	.93
[4]③学生に定期的に質問のチャンス(質問票の配布・回収も含む)を与えている	0.86	1.27
[4]④質問したことに対して、教員はていねいに説明してくれた	1.03	1.03
[4]⑤テキスト・参考文献やプリントなどの資料が十分に活用されている	1.12	1.12
[5]①私語や授業中の態度をきちんと注意している	1.11	1.09
[5]②遅刻者に対してきちんと対応している(注意する・減点するなど)	0.74	1.32
[5]③出欠をきちんととっている	1.50	.92

(3) 学生の授業に対する態度の自己評価

ところで、学生による授業評価の分析を行うにあたり、授業評価を行った学生が、どのような態度で授業に臨んでいるかということは、非常に重要である。先行研究でも、授業に対してまじめに取り組む学生と、そうではない学生とでは、授業評価に向かう態度も評価結果も異なるという結果が出ている。そこで、授業評価を行った学生の授業に対する態度についての自己評価を、出席率と質問項目 [6] ①～⑤の各項目より見た。詳細な数字は図表 3 を参照されたい。

図表 3 を見ると、出席率については 8 割以上出席している者が過半数を占める。授業の勉強の理解を深めるために時間外に勉強をした者は、「その通りだと思う」と「だいたいそうだと思う」を加えると約半数に上る。また、講義に遅刻しないよう努めた者は、「その通りだと思う」と「だいたいそうだと思う」を加えると 8 割以上になる。私語はしないよう努めている者もまた、「その通りだと思う」と「だいたいそうだと思う」を加えると 8 割以上になる。板書だけではなく話している内容まで含めてノートをとっている者は、「その通りだと思う」と「だいたいそうだと思う」を加えると 7 割以上に上る。機会があれば積極的に質問している者の割合は他と比較して少なく、「その通りだと思う」と「だいたいそうだと思う」を加えても半数に満たない。

これらの結果を見たところ、アンケートに回答している学生は、授業に対して比較的まじめに臨んだと自己評価している者が多いと言えよう。

図表3 学生の授業に対する態度の自己評価

	実数	%
[2]出席率		
80%以上	2056	68.0
80~60%	765	25.3
60~30%	167	5.5
30%以下	17	0.6
NA	19	0.6
[6]受講態度:時間外に勉強をした		
その通りだと思う	432	14.5
だいたいその通りだと思う	1037	34.8
余りそう思わない	1051	35.2
全くそう思わない	412	13.8
NA	50	1.7
[6]受講態度:講義に遅刻しない		
その通りだと思う	1411	47.3
だいたいその通りだと思う	1077	36.1
余りそう思わない	348	11.7
全くそう思わない	92	3.1
NA	54	1.8
[6]受講態度:私語はしない		
その通りだと思う	1395	46.8
だいたいその通りだと思う	1136	38.1
余りそう思わない	296	9.9
全くそう思わない	102	3.4
NA	53	1.8
[6]受講態度:ノートをとっている		
その通りだと思う	1128	37.8
だいたいその通りだと思う	1023	34.3
余りそう思わない	524	17.6
全くそう思わない	250	8.4
NA	57	1.9
[6]受講態度:積極的に質問している		
その通りだと思う	579	19.4
だいたいその通りだと思う	860	28.8
余りそう思わない	973	32.6
全くそう思わない	512	17.2
NA	58	1.9

(4) 授業満足度を規定する要因の検討

全12項目の授業評価質問群のうち、「[3] ①この講義を受けてよかったと思う」（以下、「授業満足度」と表記）は、他の11項目の質問とは異なり、受講した講義を総合的に判断して、講義を受けてよかったか否かを判断している評価であるとみなすことができる。そこで、学生が満足している授業とはどのような授業なのかを検討するために、「[3] ①この講義を受けてよかったと思う」への回答を従属変数とし、それ以外の11項目を独立変数とした、単回帰分析を行った。「授業を受けてよかった」という質問項目の平均値は1.18 (SD=1.02) である。その科目数の分布は、図表4に示したとおりである。平均値が1.0未満の科目は、26科目と少ない。逆に、1.0を超える科目は98科目、そのうち1.5を超える、学生が満足したと評価される講義は40科目に上る。

図表4 「この授業を受けてよかった」得点分布

	-2.0~+ 0.5未満	0.5~1.0 未満	1.0~1.5 未満	1.5~2.0
科目数	7	19	58	40

また、単回帰分析の結果は、図表5に示す通りである。なお、授業評価を行った12の質問項目はいずれも相関が高い変数同士であるため、多重共線性の可能性を考慮し、多変量を強制投入する重回帰分析は行わなかった。

11項目全ての単回帰分析において、定数・偏回帰係数ともにt値は $p < .01$ であった。ここで、「授業を受けて良かったと思う」ということを最も強く規定する要因となっている項目を知るために偏回帰係数を見てみると、最も大きな値を示しているのは「[3] ②何がテーマか毎回明確である」であり $B = .623$ である。次に、「[3] ④講義に関連した問題やテーマへの関心度が高まった」が $B = .597$ と続き、さらに「[4] ①教員の説明は分かりやすい」が $B = .554$ と続く。偏回帰係数の値が.50を超えているものはこの3項目であった。あとは、「[4] ②講義はシラバスにそって進んでいる」と「[4] ④質問したことに対して、教員はていねいに説明してくれた」の偏回帰係数値が.471と続いている。

逆に、偏回帰係数の値が小さいものは、「[5] ②遅刻者に対してきちんと対応している」、「[5] ①私語や授業中の態度をきちんと注意している」、「[5] ③出欠をとっている」が $B = .20$ 台となっている。

つまり、学生の授業満足度の規定要因は、「授業のテーマが毎回明確であり、現在起こっている問題で講義と関連したものへの関心が高まるような内容の授業」であり、「その話し方や説明の仕方、黒板の使い方などが分かりやすい授業」ということになる。逆に、[5]の「講義の管理」に関する項目は、学生の授業満足度には、比較的関連性が少ないと言えよう。しかし、授業評価を測る11項目の質問群は、全て、授業満足度に有意な規定力を持っていたことを、もう一度付記しておく。

図表5 授業満足度の規定要因を探る単回帰分析

	定数	B	調整済み R2乗
[3]②何がテーマか毎回明確である	.400	.623	.356
[3]③高校とは違う高度で専門的な内容である	.691	.361	.111
[3]④講義に関連した問題やテーマへの関心度が高まった	.652	.597	.443
[4]①教員の説明は分かりやすい	.605	.554	.376
[4]②講義はシラバスにそって進んでいる	.631	.471	.183
[4]③学生に定期的に質問のチャンスを与えている	.877	.347	.187
[4]④質問したことに対して、教員はていねいに説明してくれた	.692	.471	.225
[4]⑤テキスト・参考文献やプリントなどの資料が十分に活用されている	.839	.302	.111
[5]①私語や授業中の態度をきちんと注意している	.848	.294	.098
[5]②遅刻者に対してきちんと対応している	1.006	.230	.087
[5]③出欠をきちんととっている	.727	.299	.073

(5) 授業満足度カテゴリ別 各項目平均値

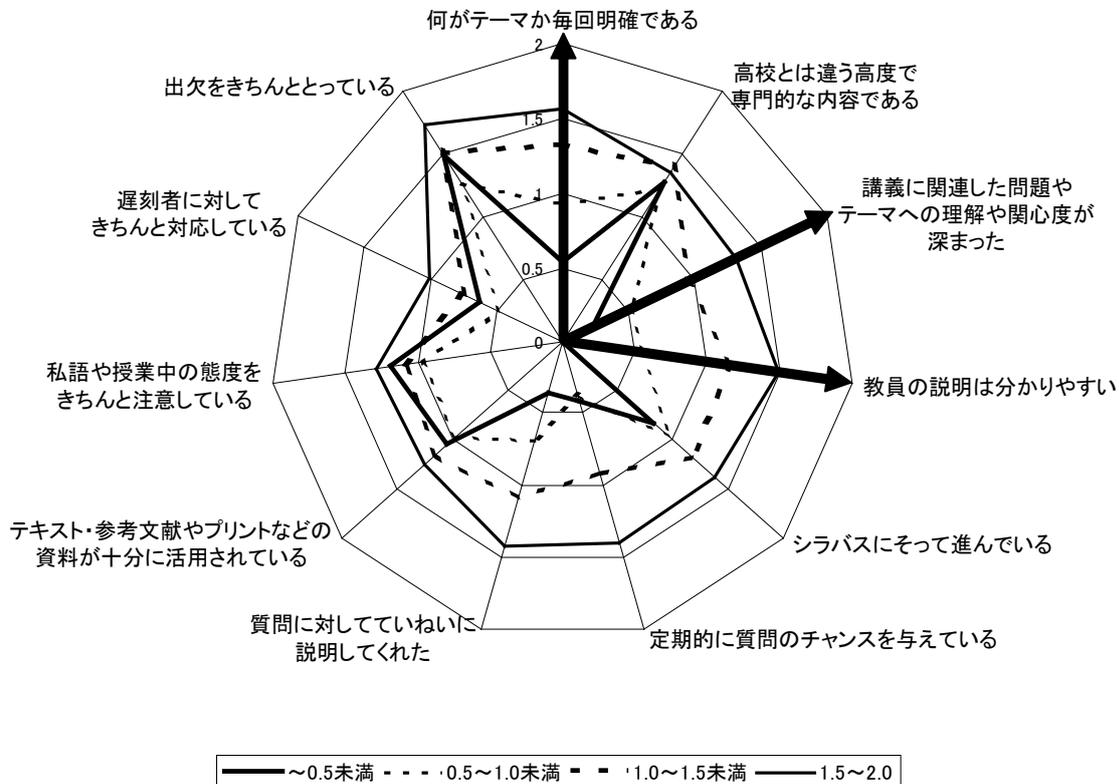
前項では、学生の「この授業を受けてよかった」という評価をより強く規定している要因を探った。本項では、それをビジュアル化して、より分かりやすく説明する。

図表6は、「この授業を受けてよかった」という授業満足度の平均値によって124科目の講義を4つにカテゴリ化し（～0.5未満、0.5～1.0未満、1.0～1.5未満、1.5以上の4カテゴリ）、それぞれのカテゴリに属する科目が、授業満足度以外の11項目の質問に対して、どのような平均値を示しているかを図示したものである。前項の回帰分析で、授業満足度を強く規定していると明らかになった「何がテーマか毎回明確である」、「講義に関連した問題やテーマへの関心度が深まった」、「教員の説明は分かりやすい」の3項目については、軸をより太い線で強調している。

この図を見ると、先ほど回帰分析を行った結果が、ビジュアル化されて分かりやすいだろう。とりわけ、「教員の説明はわかりやすい」という項目については、授業満足度が0.5未満の科目群では、0.00の値しか示しておらず、非常に低いことが分かる。逆に、「高校とは違う高度で専門的な内容である」や「出欠をきちんととっている」、「テキスト・参考文献やプリントなどの資料が十分に活用されている」、「私語や授業中の態度をきちんと注意している」という項目に関しては、学生の授業満足度によって大きな差は見られず、授業満足度が高い講義でも低い講義においても、平均して高い評価を受けていることが見て取れる。

この図表を見て明らかなのは、「授業満足度が高い講義は、いかなる項目についても評価が高い」ということである。しかし反対に、授業満足度が低い講義は、授業管理や授業内容の専門性など約半数の項目においては、他の授業満足度がより高い講義群と比較しても評価が特段に低いということはない。しかし、授業のテーマの明確さ・関連テーマへの理解関心を深めたか・説明のわかりやすさ・質問への丁寧な回答など、「授業・説明のわかりやすさ」に関連するとも言える項目においては、授業満足度が高い科目群よりも、かなり低い評価を受けていることが分かる。この結果より、学生の授業満足度が低い科目については、その満足度を高めるために、まずは「分かりやすい授業」を心がけることが重要だと言える。

図表6 授業満足度カテゴリ別 各項目平均値



6 考察と今後の課題

本稿では、2003年度の本学学生による授業評価アンケートの再分析を行い、本学講義の評価の実態把握、そして、学生の授業満足度をより強く規定する要因の把握を行った。

結果は前項までに記述したとおりであるが、特に重要な点を以下に挙げる。

学生が「満足できる授業」に求めているものは、「分かりやすい授業」であり「質問に対して丁寧に答える」、「現在起こっている関連した問題についての理解や興味が深まる」ということであることが明らかになった。逆に、私語や遅刻・出欠といったいわゆる授業管理や、高度で専門的な内容といったことは、学生の授業満足度には、比較的小さな規定力しかもたないことが分かった。

これらの示唆は非常に重要だと考えることができる。なぜならば、学生が「とりわけどうい授業を教員に期待しているのか、どうい授業をすると満足だと思うのか」ということを示す裏付けであるからだ。「分かりやすい授業、興味や関心が深まる授業」というのは、授業としては至極根本的な重要ポイントである。しかし、教えるテクニックによって教員になったというわけではない大学教員においては、これらは当然可能であるというわけではないのだ。授業が分かりやすい・興味や関心が持てる授業にするために必要なのは、教員の授業への熱意や準備であると言えよう。自らの講義内容や説明内容を振り返りながら講義の準備を行い、学生が理解しているか確認しながら授業を進めていくということが、学生のニーズを満たす

ために重要なことである。

しかし、授業を改善するためには、授業評価アンケートは、指導内容に即して教員が個別に実施するのがもっとも意味があるという指摘がある（児玉ら；2004）。指導の内容は、教養科目や専門科目、また一般科目と語学科目など、教科の種類によって様々に異なるものだからだ。本アンケートは最低限の、共通する評価項目の基準であるため、さらに個別に学生が授業に対してどう感じているかを教員個々人で調べながら、授業を行わねばならない。

ところで、学生による授業評価についても、問題点がないわけではない。まずは、学生が適切な評価を行うかという懸念がある。これに関しては、単位未習得者はあきらかに低い評価をしているという研究結果もある（牧野、2003）。つまり、自分が真摯に講義に向かっているにもかかわらず、講義の評価を低くして、講義にその責を負わせるということがあるのである。本学の授業評価アンケートは授業期間中に行うものであり、まだ試験も行っていないければ、当然学生達は自分の成績についても知らない段階で行っている。このタイミングがいいのかどうか、他大学の授業評価結果も見つつ、検討することも必要かもしれない。また、この授業評価アンケートというものは、授業を受け終わっての「満足度」という反応を知るとどまるものである。その授業が本当に学生のためになったのか、知識や能力が学生の身に付いたのかということ測定するものではない。つまり、授業評価による満足度が高い授業だけが「いい授業」というわけでもないのである。

決して、この授業評価アンケートのみでもって、教員の評価を下すべきではないということは、先行研究でも言われている通りである。教員の評価は授業評価の一面だけでは測れない。今後は、本学においても、教員同士の相互評価、第三者評価なども取り入れ、多角的な評価をする必要がある。アメリカでは、同僚教員による評価とともに、学生による授業評価も人事評価に考慮している場合がある。しかしこの場合、不真面目な学生が教員に対して暴挙を振るう可能性もある。

また、そもそも学生が一方向的に、そして無記名に行った評価を、全て受け入れるかどうかという問題もある。これについては、評価する側・される側としての教員と学生との間の信頼関係を築くということが重要である。本学ではどうかということを、いま一度振り返って検討してもいいと思われる。

最後に、今後の課題について触れたい。まず、アンケート票の適切性についてである。授業評価アンケートの質問項目については、各大学によって様々な項目が設定されている。中には、質問群に因子分析を行い、授業評価を測定するにあたって必要・妥当な質問項目について検討している大学も存在する。本学においても、今後、質問項目の妥当性について、一度検討してみる必要があるだろう。

また、先に記述したように、本学では、学生による授業評価は実施されているものの、教員による学生の態度についての評価や教員相互の授業等に対する評価は実施されていない。またアンケート票についても再検討が必要である可能性がある。しかしながら、延べ人数 3000 人超による授業に対する評価データは貴重なものであり、今後の FD 研究のために少しでも参考資料になればと考え、本稿を書いた。今後は、教わる側の期待の調査分析、学生生活全般に関する総合評価とその要因、それらの期待種別や学年による満足度の相違など、幅広く分析をする計画である。

とは言え、前述の通り、本学において学生による授業評価アンケートが始まって 3 年目で、対象学生の学年が上昇していることもあり、年々その評価の平均値は上昇してきている。学生による評価を見て、教員自らが自分の授業を顧み、学生のニーズに応えるために、反省点・改善点を修正しながら講義を行ってきた足跡とも言えよう。このように、講義を分かりやすくし、学生たちの興味を引くような講義を行うための不断の努力は非常に重要であり、学生による授業評価アンケートは、そのための一部の役割を担うものであろう。

謝 辞

授業評価アンケート再分析にあたり、長岡大学 FD 研究会で数度とりあげ議論をするなかで、多くの示唆を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 稲吉正実・柴田賢（1998）「授業評価アンケートのデータ解析、名古屋文理短期大学紀要、第 23 号、105 - 110
- 荻谷剛彦（1992）『アメリカの大学・ニッポンの大学』 玉川大学出版部
- 児玉善仁・別府昭郎・川島啓二編（2004）『大学の指導法 ー学生の自己発見のために』 東信堂
- 冷水啓子（2003）「学生による授業評価（Ⅲ）ー科目分類、学年、出席状況による結果の相違ー」、桃山学院大学社会学論集、第 36 巻第 2 号、125 - 151
- 大学審議会（1991）「大学教育の改善について」（平成 3 年 2 月 8 日答申）
- 大学審議会（1998）「21 世紀の大学像と今後の改革方策について ー競争的環境の中で個性が輝く大学ー」（平成 10 年 10 月 26 日答申）
- 星野敦子・牟田博光（2003）「大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因」、日本教育工学会論文誌、27、213-216
- 牧野幸志（2001）「学生による授業評価の規定因の検討（1）ー多変量解析を用いた因果モデルの検討ー」、高松大学紀要、36、55 - 66
- 牧野幸志（2002a）「学生による授業評価、満足感と成績との関係 ー成績の悪い学生は本当に授業を酷評するのか？ー」、高松大学紀要、38、35 - 47
- 牧野幸志（2002b）「学生による授業評価の規定因の検討（2）ー成績の判定基準が授業評価に与える影響ー」、高松大学紀要、38、63 - 71
- 牧野幸志（2003a）「学生による授業評価の規定因の検討（3）ー記名式による調査が授業評価に与える影響ー」、高松大学紀要、40、63 - 75
- 牧野幸志（2003b）「評価懸念が学生による授業評価に与える影響（1）ー授業者担当者への評価懸念のない場合ー」、高松大学紀要、40、77 - 87
- 牧野幸志（2004）「評価懸念が学生による授業評価に与える影響（2）ー授業担当者への評価懸念のある場合ー」、高松大学紀要、41、75 - 85
- 文部科学省（2004）「大学における教育内容等の改革状況について」（2004 年 3 月 23 日報道発表）
- 渡辺勇一（2003）「学生による授業評価の平均値は後期に高くなる」、
<http://www.ac-net.org/home//watanabe-y/03106-hyouka2.html>